
随 想

**新年をむかえるにあたって**

日本鉄鋼協会会長 佐野 幸吉

昭和 42 年の新春をむかえるにあたり、一言愚見を述べて御挨拶の言葉といたしたいと存じます。

平和で、豊かな福祉国家ということが、多くの日本人の期待する将来像であると思いますが、具体的にどうしたら、それが実現できるのでしょうか。

日本は鉄の年間生産額では、アメリカ、ソ連に次いで第 3 位であります。国民 1 人当たりの所得からいうと、世界の 21、2 番目でしかない。アメリカの約 6 分の 1、フランスや西ドイツの約 3 分の 1 であります。そのような、むしろ貧乏国から、豊かな国になるには、どうしたらよいかということが、問題であります。

日本には資源が乏しいが、人間の数は相当なものであり、有効面積についての人口密度は、おそらく世界一かと思えます。それだから、貧乏なんだという意見があります。

しかしながら、これは少し消極的な考え方ではないでしょうか。人口密度が高いということは、人間が相互に協力するには、むしろ有利な条件であるといえるでしょう。

また、資源が乏しいということなのですが、いったい、資源ということはどういうふうに考えたらよいのでしょうか。最近の技術革新によれば、資源の定義を変えなければならなくなりました。従来の技術では、立派な資源であつたものも、新しい技術によつては、まったく用途がなくなるといふことはしばしばであり、さらに、資源を持たなかつたものが、新しい技術によつて、資源に不足しなくなるということも十分考えられるのであります。現に、日本の鉄鋼業が、今日の盛大を獲得したのも、一つは鉄鉱石を持たないわが国が、輸送革新と臨海製鉄所の建設ということで、資源の問題を解決したことによるものであります。

資源の中で、最も重要なエネルギー資源についても、目下問題は流動しつつあるということが出来ます。少なくとも、石炭から石油、原子力と変わりつつあるのであります。

このように考えてみますと、今日の技術革新時代におきましては、資源とは、人間の頭脳であり、人間の創造力であるというふうに考えるべきであります。

ですから、日本が貧乏なのは、資源がないからでも、人間が多いからでもありません。われわれが、自から考えて、創造力を発揮しようとしなからであります。つまり、創造意欲の問題であります。

日本の技術は導入型であり、これを開発型に転換しなければならないのだということは、しばしば耳にしております。日本は急いで、外国文化を導入して、欧米に追いつくことが、先決問題であるということが、明治以来の国策であり、それは、今日からみて、非常な成功であり、おさめた成果は高く評価すべきであります。

しかしながら、今日では、もはや技術の専門分野によつては、例えば鉄鋼技術は、欧米と同等の水準に達したのであり、これからの問題としては、国際協力によつて、世界の鉄鋼技術の進歩に、貢献しなければ、自分の進歩もありえないという段階に達したのであります。つまり、いつまでも、われわれは導入型でおることは許されなくなつたというわけであります。

これまでやつて来た技術の導入ということでは、それに最も適した技術者の養成が必要であるというので、わが国の工学教育の实体は、欧米の技術について、教えこむということに、従来重点があつたこともまた当然であります。

しかしながら、欧米における大学の創設の歴史からみて、本来大学教育というものは、教えこむということではなく、知識の創造に対する自発的意欲ということに重点があり、この点が高等学校教育と違うと考えるのであります。つまり大学教育というものは、受けるものではないのであります。それだからこそ、大学の自治が保証されているのではないのでしょうか。

技術を導入型から、開発型に転換するには、先づ第一に、技術者の養成のための工学教育の重点を、大学教育本来の姿に、たたせることから始める以外に方法がないと思うのであります。

わが国における冶金とか金属工学関係の大学卒業生は、毎年約 1500 名、アメリカでは約 750 名、西ドイツやイギリスは約 150 名ということであります。これは非常に心強い数値ではないのでしょうか。これだけの学生諸君が、鉄鋼技術の導入型から、開発型への転換に協力して下されば、その成功は期して待つべきものがあることを、確信する次第であります。